

社会福祉法人 聖ヨハネ学園
地域生活支援センター光（障害者支援施設）

「移乗サポートロボットHug」導入による生産性の向上

課題

- ・ 入所者の8割が重度の脳性麻痺であり、加齢に伴い介護の度合いが増加している。
- ・ ご利用者のADL及びQOLの向上のためにはベッドからの離床した生活が不可欠であり、職員が創意工夫を重ねて実施しているが、身体的な負担は増えている。
- ・ 福祉機器の多くが高齢者を対象としており、なかなか身体障がい者に対応したものが少ない。

移乗サポ
ートロボ
ット
Hug

機器
導入

成果

- ①業務上の質の向上
 - ・ 導入前は2名で行っていた介助を1名で行うことが可能となった。
 - ・ 職員の身体的負担を大幅に削減することができた。
- ②量的な効率化
 - ・ 年間業務時間数削減率:31.3%

ロボット機器等を導入した業務内容(概要)

ベッド・車椅子間の乗り移り。車椅子・トイレ間の乗り移りに使用。



職員の声など

【良かった点】

- ・ 導入前は2名で行っていた介助を1名で行うことが可能となった。
- ・ 職員の身体的負担を大幅に削減することができた。

【悪かった点】

- ・ 排泄介助において、導入前の力任せの介助より1回あたりの介助時間は長くなった(想定内)

【今後の課題】

- ・ 重度身体障がい者を対象として設計された福祉機器ではないため、使用できるご利用者の身体状況が限定される

【気づきなど】

- ・ 職員の力任せやリフトによる介助と違い、ご利用者自身の残存能力を使う姿勢なので、ご利用者自身が主体的な動きとなる。
- ・ 移乗介助をされるのではなく、自らの動作として行う点がご利用者に好評だった。